

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日連綿發行出版元認許第百六十七号  
平成二十三年三月一日発行(第百十四卷)第三号

# ホトトギス

三月号



## 俳句随想 〔三百四十五〕

汀子

芦屋市が市になって七十周年を迎えた。それを記念した十一月三日の祝賀会の案内状を頂いた。その日はロイヤル俳壇水曜日級の級を私が担当する約束の日であった。偶数月は講師に千原叡子さん、奇数月は私が講師を務めさせて頂いている。たまたまその日はそちらへ行くつもりであったので、詳しく案内状を読まないまま仕舞った。市の教育委員会から電話を貰い、その日は感謝状を渡したいから出席して欲しいと言われた。ロイヤル俳壇には叡子さんに行つて頂くことにして、出席するとの返事をした。十二年間、芦屋市教育委員として市の行政に関わらせて頂いたが、一緒に仕事をさせて頂いた朝日さん、牛田さんのお二人は急逝され、今は森輝彦さんと私が生き残っている。会場はルナホールで大勢の受賞者が参加されていた。この度、同じ会場ルナホールで芦屋市制七十周年の記念にNHK主催の「俳句王国」がオープン方式で開催された。主宰は私稲畑汀子。ゲストは落語界大御所桂三枝師匠である。吟行地に虚子記念文学館とわが家の庭を開放した。

俳句王国も長寿番組である。色々な俳人が主宰として出るが、皆様も参加してくれと言われたら是非断らないで出てご自分の主義主張をしっかりと述べて頂きたいのである。

旬日記 汀子

平成十二年三月一日 ロイヤル俳壇

心に添はねど咲きぬ迎春花  
初音聞く旅も近しと思ふとき  
鳴雪忌ゆかりの文庫とのへり  
触れたくて触れたくなくて迎春花  
その後のはとは春告鳥に聞く

三月四日 関西草樹会

霽るも六甲はわがまほろばよ  
水音もどこか違ひて水温む  
難飾り終へて淋しさ口にせず  
今日よりは難と存問して起居  
難の間に空席一つありにけり

三月六日 芦歴ホトギス会

朝より木の芽起しの雨ならむ  
初雷や隣の席の空きしまま

三月七日 下萌旬会

飾りたる難に托す心あり  
初雷に聞きしは夢かうつつかと  
初雷の轟く大地目覚め易く  
晴れてすぐ降つて如月過ぎ易く  
この難に集ふ一人を失ひし

三月九日 大阪倶楽部

草の芽の風の届かぬところかな  
窓少し開け春塵の部屋となる  
草の芽を踏んでをりしと告げられず  
水音にいざなはれゆく東風の庭  
春塵を洗ひ流して雨一日  
六甲の稜線模糊と春の塵

三月九日 綿業倶楽部

春雷の次は遥かでありしかな

春めきしことを忘れてしまふほど  
春めきてゐる旅先に心置く  
少しづつ捗る仕事春めきて  
そののちの消息間はん春めく日  
三月十一日 清交社

又しても目の行く難を買ふことに  
幾度も戻る陽気に処す木の芽  
健康の出を又語りぬし木の芽風  
思慮の過信いましめ春寒に  
難市の通りすがりでありにけり  
春の雪六甲山にある子細  
水温みぬし旬日のおとんどり  
蛇穴を出して旅路の待つてをり  
すぐ雪の解けて六甲山笑ふ  
強東風の一日家居となることも  
寒暖をいとふ一日よ東風の朝

三月十三日 関東ホトギス俳句大会前日旬会

旅心全開にして麗かに  
照す山笑ふ山あり嶺連ね  
飛びさうな杉の花粉と見つて来し  
配られて花見弁当らしきかな

三月十四日 関東ホトギス俳句大会

をさまりし風の饒舌富士霞む  
如月の富士を遥かに置くホテル  
遠霞富士一枚にしてをりぬ  
三月十四日 関東ホトギス同人会

三月十四日 有恒倶楽部

みな霞む富士見に出たり入つたり  
三月十六日  
富士隠す距離とはならぬ霞かな  
花ミモザ彼女の手も来ない  
二日目は旅の強東風をさまりし  
富士を見てやがて霞を見てをりぬ

三月十六日 無名会

如月のたちまち半ばなりしこと  
富士よりの水の透明水草生ふ  
幻想も現実も如月の日々  
人惜み現目惜みて如月の  
考への堂々巡り水草生ふ  
三月十七日 夏潮旬会

仰ぎ見て又見下ろして初桜  
駐車なきミモザの花の指定席  
水音の届く二階も難の間  
稿債を一つ仕上げし花の屋  
初花に集ふ一人を悼みつつ  
三月十八日 心春の会

人悼む心春寒ほどけず  
みよし野の旅の近づく西行忌  
音も又明るさ誘ふ春の水  
明るさに油断のありて春寒し  
霞みても富士の所在のあるところ  
大広間小さく使ふ春灯  
三月二十日 ホトギス社吟行会

霞より抜けて俯瞰の十五階  
病む人の消息間はん春寒し  
華やかといひうららかと云ひ直す  
俯瞰して景に加はる霞かな  
三月二十六日 時雨会

六甲の山頂白き雪の果  
独活小屋を出でればかりの白さかな  
風強きことの加はる雪の果  
春時雨あれしと告げて訪ね来し  
買ひ忘れたるとは旬の独活のこと  
三月二十七日 旬会と講演の会

残し置きたる種芋を探しをり  
今日のこ今日片付けてあたたかし  
冴返る日を置き去りに進まねば  
家居するより春寒を遠ざけて  
ごはん粒飯嗜好好きでない理由

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年三月四日 蕉心会

奏でるはもう少し先春の水  
神のみぞ知ることの多過ぎる春  
春の水流してしまふには惜しき  
猫鳴いて長閑さ少し取り戻す  
日当りといふ魁の土佐水木  
みちのくの便り佳人と露の茎

三月五日 六甲会

鯉群来北の生活の動き出す  
鯉群来てふ古の栄華かな  
卒業はしたけどあとほどないしやう  
卒業歌一人音程外しけり  
何も彼も初心に帰り落第す  
これよりの君の為なる卒業歌  
鯉群来夢見る老の紫煙かな  
落椿そのまま置かれたる風情

三月六日 明石の春を詠む俳句会

啓蟄の大地鎮もる涙雨

三月七日 野分会菅屋例会

目鼻無き雛未来を確と見し  
これよりの歩み確かに三月来  
雛納してより吾娘の嫁ぎゆく  
虚子の袖掛けて雛の間出来上る  
雛流すより汝の未来始まり

三月八日 カトリック新聞選者吟

下萌に裳裾触れゆく聖母像

三月八日 朝日カルチャー若草句会

悲しみを解く如雛の目の潤む

春雨に大地弄ばれてをり  
人生の不思議雛の見てをりぬ  
春霖や東京都庁てふ牙城  
雛箱を開けて旧友迎へけり

三月十日 土筆会

菖蒲の芽庭園の黙解きゆく  
初雷の午前四時てふ目覚かな  
鶺鴒らしに親子の絆ありにけり  
鶺鴒らしの川幅使ひ切つてをり  
この風とこの空の下菖蒲の芽

三月十三日 関東ホトギス大会

富士よりの風に菜の花立ち上る  
まだ風の訪れ知らぬ翁草  
喪心を菜の花明り解きゆく  
二次会といふ俳論の暖かし

三月十六日 草木瓜会

薦の芽に動き初めたる甲子園  
鱈干して北は明るさ取り戻す  
薦の芽に太陽茫とありにけり  
干鱈裂く主婦の手練でありにけり  
薦の芽や命輝くものとして  
テツ子製春大根といふ至福

三月十八日 登高会

朝霞あの人のおと現れさうな  
遷都千三百年や御水取  
霞より抜け来し若き新主宰  
払ひたき霞の中に彷徨へる

三月二十日 ホトギス社吟行会

大江戸といふ大らかな大霞  
朝霞関東平野沈みゆく  
新東京タワー長閑に工事中  
さつきより伸びたんちやふか塔うらら

三月二十一日 虚子記念文学館投句

虚子館の理事会集ふ花衣  
三月二十三日 若水句会  
陽炎に掛替への無き人消ゆる  
祖母逝きて二日灸の香遣されし

三月二十四日 目黒学園句会

この斜面使ひ切つたる蕨狩  
雛納して来年を近付ける  
膝小僧擦り剥いてゐる雛の客  
ドイツ語の教授に好かれ落第す  
落第や世間を少し遠くして  
雛流し目が躊躇うてをりにけり  
丑三つの雛の吐息ありにけり

三月二十七日 ホトギス社句会

魚の棚飯蛸逃げる逃げる逃げる  
芋の芽の土恋ふ色でありにけり  
三月二十八日 野分会東京例会  
梯を重ね合せて雛納  
三月の旅立となる一会かな  
人間を遠ざけ夜の雛の宴  
京雛を飾りて都心一戸建

三月二十九日 「俳句研究」五句

継続は力なりけり卯浪寄す  
初心てふ衣は脱がず更衣  
新しき主迎へて七変化  
円虹を指呼にこの道登らねば  
三月三十一日 百夜句会  
梯を心に葉り夕霞  
青き踏む久しぶりなる君との歩  
胸元をちらとのぞかせ山笑ふ  
苜蓿青い瞳に恋せし日

# 雑詠

## 廣太郎 選

まためぐり来し露寒の被災の日 京都 安原 葉  
 露けしや終の握手となりしこと 同  
 年尾忌の近づき御句飾る宿 同  
 つちくれがはじけラガーとなりけり 神戸 藤井啓子  
 今ぞ駆け今こそ押せとラガーたり 同  
 ラグビーのOBはみな重役風 同  
 古城址といふ草いきれだけの山 相模原 木村享史  
 人亡びても蚯蚓鳴く世はあらむ 同  
 人々のけふも残暑でありし顔 同  
 秋晴や昨日も今日も津軽富士 東京 大久保白村  
 年尾忌に会ふ約束をして別れ 同  
 年尾師の秋思を想ふ忌日かな 同  
 ふところに鳴きあゝる如き虫を聞く 福山 竹下陶子  
 海中に竜宮のあり月天心 同  
 露の身のホ句にさすらひ七十年 同  
 魂を霧に吸はるるごとと歩く 静岡 須藤常央  
 霧に呼び掛くれば応へ遭難者 同  
 落石の音曳く霧を登りけり 同

曲りたくなる路地のまた浦の秋 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 鴨の水より立ち上がる湖中句碑 同  
 松手入すみたる幹のしづもれる 同  
 円周の締めつけてくる秋の声 香川 湯川 雅  
 冬ざれて音短調でありにけり 同  
 初露の煌めくために丸く丸く 同  
 秋雨の旧街道を迷ひ来し 神戸 山田佳乃  
 やや寒や寂びし茶室の雨の音 同  
 海光や漣ほどの秋の風 同  
 白鳥の十二の光舞降り来 奈良 古賀しづれ  
 十二羽の白鳥万の鴨制す 同  
 万の鴨湖面を剥すごとと翔てり 同  
 秋の灯のひとつに鞆の常夜燈 神戸 後藤立夫  
 潮合といひ秋潮のすれ違ふ 同  
 秋晴は水平線の晴るること 同  
 渡り鳥曲がれば河の曲りけり 同  
 まくなぎをとらへてしまひたる睫毛 同  
 吾の熱に降りて来たりし冬の蠅 同  
 雲運ぶ風蜻蛉を乗せる風 東京 橋本くに彦  
 清澄を現住所とし鴨の陣 同  
 散り積るものが冬へと渡す色 同  
 初鴨に平らな流れありにけり 同  
 引き摺りてみても離さず千歳飴 八尾 山下美典  
 雨ごとに花野の色を失せてゆく 同

# 雑詠句評（二月号より）

しげ人・暮潮・比奈夫  
雅・純也・昭代  
仁義・佳乃・一步  
くに彦・廣太郎

## 逆転本塁打四万人秋思 神戸 立村霜衣

「逆転本塁打」「四万人」「秋思」と三つの名詞を並べただけの俳句である。ただそれだけであるが、臨場感溢れる一句になっている。しかも、本塁打が飛び出す前と後のギャップの大きさも手に取るように伝わって来て面白い。勿論、三つの名詞の構成であるため、全て漢字で表記してある。その表記によっても間髪を入れない一連の動きが伝わってくる。

野球観戦者のほとんどであろう「四万人」の一人は、作者自身だったかも知れない。恐らく秋思よりも落胆、悲嘆といった趣が強かったに違いない。わざと「秋思」を季題に持ってきたのも作者の俳味（遊び心）ととってよいかと思う。（しげ人）

最初から種を明かすのも気が引けるが、この試合は、平成二十二年九月三十日に甲子園球場で行なわれた阪神対横浜戦で、丁度この日は長年キャッチャーとして活躍した矢野耀大選手の引退セレモニーが試合後予定されていた。観客四万人の阪神ファンの応援で、試合は八回裏を終わって三対一と阪神リードで迎えた九回表には勿論この人藤川球児が出て、誰もが勝利を確信した矢先、連続フォアボールの後のバッターに、何とスリーランを浴びてしまい、試合は負けてしまったのである。そのホームランの瞬間が何とも切なく季題を通して語られている事か。（廣太郎）

## 未だ名を貰はぬ月を愛でにけり 神戸 長山あや

「未だ名を貰はぬ月」とは待宵以前の月であろう。月を愛でるのは中国の中秋節を模したものでろうが、山本健吉はその以前に日本では信仰的な意味から、この日の月を大事にしていたと書いている。そのことは待宵以後更待までの名を与えたことでよく分かる。しかし、この作者はそれ以前の月を愛でると言うのだから、いかに月を愛でる気持ちが強いか察せられて、そのことが句のしらべとして出ているのがいい。

余談だが、私はヨーロッパで九月・十月の二カ月間及びフィリピンで通算一年半滞在したことがあり、ヨーロッパ人もフィリピン人もきれいな月が出ていても見ようとしないうことを知った。故

人だが著名な文芸評論家だった小林秀雄も「考えるヒント」も中でそのことを書いている。(暮潮)

秋の月をこよなく愛する日本人は、その月齢に美しい名前を付けてきた。例えば「十六夜」や「立待月」等の月の呼称は、古今詩歌に詠まれてきた。それだけではなく、月の満ち欠けにおける「○日月」も、それぞれに風情があるものである。日本人の心を見事に捉えている。(廣太郎)

(以下略)

# 天地有情

# 江子選

露寒や忘れ得ざりし被災の日 京都 安原 葉  
北国はもう初雪と年尾の忌 同  
衣被つるりと故郷裏返す 東京 稲畑廣太郎  
丸ビルに一つ灯りて夜業かな 同  
神有の出雲は神の雑魚寝かな 榎原 稲岡 長  
山茶花の花のさびしさ何やらん 同  
新しき我が家にひとり秋の雨 東京 今井千鶴子  
やや寒につけても思ひ出ださる 同  
西虚子忌詣で満たされたる帰心 金沢 藤浦昭代  
横川去る霧に紛れてゐる暮色 同  
フアーザーズデー純白の薔薇一花 神戸 後藤比奈夫  
暑きこと言はず涼しきことを言ふ 同  
コスモスの縫れし高さ解く風 吹田 宮崎 正  
箒目は今朝も揃ひし神無月 同  
忌ごころに集めし朴の落葉嵩 たつの 浅井青陽子  
メモをしてゐていつの間に秋の暮 同  
湖風に障子の白さ閉ざさるる 龍ヶ崎 今橋眞理子  
五六羽に後れ二三羽鴨夕べ 同

信心の歩に紅葉坂落葉坂 奈良 古賀しぐれ  
七坂をめぐり切つたる紅葉狩 同  
切り結ぶ刃は竹光の菊人形 神戸 三村純也  
戦ッ場は半ば画割菊人形 同  
弾けとぶボールに弾けとぶラガー 同 藤井啓子  
ラグビーの夕影長く曳きにけり 同  
高原の風の尾擱む草紅葉 渋川 木暮陶旬郎  
轆轤場に灯火親しくひとりかな 同  
草もみぢ見えかくれする水の音 東京 今井肖子  
街路樹にほんの一卷き蔦黄葉 同  
病みて長き妻へ色鳥来ては去る 仙台 赤川誓城  
みちのくに生まれ育ちて寒がりて 同  
行秋や水面に映る風の翳 神戸 長山あや  
球根の冬眠の月日始まりぬ 同  
露寒のあしたの大地しかと踏む 箕面 井上浩一郎  
石山の石にうすうす紅葉かな 同  
御僧の先づ申されし萩不作 徳島 上崎暮潮  
年々に鳴門の月を見て米寿 同

# 天地有情句評

汀子

やや寒につけても思ひ出ださるる

東京 今井千鶴子

追慕。

西虚子忌詣で満たされたる帰心

金沢 藤浦 昭代

花鳥諷詠の徒。

露寒や忘れ得ざりし被災の日

京都 安原 葉

暑きこと言はず涼しきことを言ふ

神戸 後藤比奈夫

こんな露寒の朝。忘れられない災害。

生活の智恵。

丸ビルに一つ灯りて夜業かな

東京 稲畑廣太郎

箒目は今朝も揃ひし神無月

吹田 宮崎 正

孤独との闘い。

神無月の社の疎かならぬ佇まい。

神有の出雲は神の雑魚寝かな

樞原 稲岡 長

忌ごころに集めし朴の落葉嵩

たつの 浅井青陽子

神の雑魚寝とは妙。

朴の大きな落葉一枚ずつに偲ぶ想い。